

は、すだれに、戸障子と、薄暗かったが、ガラス窓はいり、電灯をとすなどの変化ももなつて、部屋を細分化してきたようである。雪の多い寒国であるのに、雨戸がなく、障子戸だけで過してきた慣行は珍しい。

炉はいろいろ、ゆるいなどともいつているが、いろいろは居るといふ言葉と関係があるらしく、家族が集つてだんらんする場所になつていた。そのため、座席が定まつていて、中じきりの上に相当する炉の正面を横座といつていた。これは主人の座る場所で、主人以外は坊主か神主くらいしか座らない。「横座に座るなら、米を買え」などともいつていた。長男などは無意識に座つても、叔父や婿などは、決して座れないほどの権威のある座で、民俗学ではこれを「横座の権威」などともいつているほどである。北会津村などでも、旧習を固持する、所謂かたい家では、この座席の権威は相当強かつたようである。

その北裏が、かか座、その向いが客座であるが、そう呼んでいる人もないことはないがあまり聞かない。ただ横座の向いを木じりとは、よくいつていた。客座の側にはたきぎ置き場があり、まき割り台と、ちゅうながあつて、木を割つては、木尻の方から焚いつていた。

このいろいろが、にわの床をあげる機会に、にわに移つて、かつての炉、たきぎ置き場をとりかたつてしまつた家が多い。これは家族の住いの座席も崩して、家族を民主的にする一方、長幼の席を崩すことにもなつてゐる。

にわの流し前とよぶ水屋は早くから板の間にしてゐる家も多かつたが、にわは、小屋を別棟につくる前は農作業場でもあつたので、土間のままにしておくか、藁など敷いておいた所が多い。小屋が別棟になると、とんぼうちという、下駄ぬぎ場の一部のみ土間にしておいて床をあげ、いろいろを、にわの釜場に並べてつくるようになった。それで家族の団らんの場も自づとにわに移つてゐるが、主人はなかなか、にわには下ろうとしないで、か